

## 他の文化を学び、自分の文化を学び直し伝える授業の実践

### —自分の文化を調べて分かったことをまとめ、発表する活動を通しての生徒の成長—

田中阿貴・高橋仁子・黒澤友美（東京都北区立赤羽岩淵中学校日本語学級）

#### 1. 実践の目的

小中学生で来日した生徒にとって母語や母文化を深く知る機会は少なく、仕事で忙しい保護者と深い話をする機会も少ない。母語を伸ばし、母文化を深く学ぶ授業の必要性を感じるが、現状では母語指導はできない。そこで、以下の3点を目標に本実践を行った。①調べたり、保護者に聞いたりする中で母語や母文化を学ぶ機会をつくる②日本語で発信する活動をとおして日本語で表現する力を高める③発表を通して他の生徒と関わり、認められることで自己肯定感を高める。

#### 2. 実践の場の特徴

本学級は自校を含めて区内7校から通級するセンター校方式で、教員3人+指導員1人、生徒は24人である。日本語力に応じて週1~3回(2~6時間)の個別指導が中心であるが、教員が全ての生徒を理解するために週ごとに交代して指導している。生徒の出身は中国が約半数、次いでネパール、フィリピン等で、非漢字圏出身者が全体の6割を占める。本実践は12月に在籍していた生徒の中で1年生は全員に、2・3年生は希望者のみで計8人に行ったものである。

#### 3. 対象生徒の状況

A(本発表の主対象生徒):ネパール出身。滞日2年程度。母国でも勉強が苦手で、母語は話せるが読み書きはほとんどできない。英語では簡単なやりとりはでき、簡単な文章であれば読める。しかし、書くことは短文でも誤用が目立ち、書字の力に課題がある。日本語の学習にも集中できず、姿勢も乱れ、落ち着かず、学習が定着しない、字形が整わないなど課題が多い。質問には単語や短文で答えられるが、自ら表現することはあまりない。3年生になって成長が見られ、計算や漢字の力が伸び、指導の際のやり取りをとおして日本語で表現できるようになった。

他7人:ネパール、ベトナム、バングラデシュ、中国出身で、滞日2年~4年弱。母語の力が育っていて母語である程度読み書きできる生徒もいれば、母語での読み書きは苦手で話すことも忘れつつある生徒もいる。日本語力も差があるが、全員まとまった文章を書くことが苦手である。

#### 4. 具体的な実践の内容とその過程

##### 4.1 学級全体での指導(個別学習)

12月の学級だよりに自分の文化や言葉を大切にしようということや多言語の新年の挨拶を掲載し、一緒に読んで動機付けを行った。その後、日本のお正月について学習し、日本の文化を学んだ。そして、次は自分の文化を紹介しようと説明し、発表のモデルを見せた上でパソコンか手書きかを各自が選び、両親や親戚に尋ねたりインターネット等で調べたりして自分の文化について日本語でまとめた。完成後、本学級での授業内で発表し、1月の本校の作品展覧会で展示した。

##### 4.2 Aへのテーマ設定、動機付け(個別学習)

この指導の約1か月前、英語の教科書を使って学習した際に、「ガンジーは全てのインド紙幣に載っている」という文から、ネパールの紙幣には人ではなく色々な動物だとAが発言。その後、ネパールの紙幣を持ってきて説明してくれた。普段自分から発話することが少ないので、これを文化紹介としてまとめようと計画した。また、新500円硬貨についてのやさしい日本語ニュースを読解し、新500円硬貨を実際に見せてお金の製造技術について興味をもたせた。

#### 4.3 Aの文化紹介スライドづくり（個別学習・3回：6時間）

3.1の活動と同様に学習し、モデル文「日本のお金」を読解。Aは手書きではなくパソコンを選び、モデルスライドをひな形にして、デザインや写真、文章を変更する形で作成した。硬貨や紙幣のデザインを調べ、「〇〇には～が描かれています」の文型を示し、まとめていった。調べる前、Aはネパール紙幣の表が王からエベレストに変わったことを知っていたが、その理由は知らなかった。調べていく中で王政がなくなりエベレストに変わったことや、鹿だと思っていた動物が牛の仲間であったこと、また、同じ額の紙幣でも動物の数や種類が違うことに気づいた。さらに調べる中で、1000ルピーの象がネパールにいないアフリカ象からアジア象に変わったことやその理由を知り、興味をもってまとめていった。

#### 4.4 作品の発表

生徒作品が完成した後、発表練習の後に同時間帯に指導している生徒や指導者の前（5-7人）で発表した。Aは他の生徒の発表を聞いて自分もやると言い、練習前だったが発表し拍手をもらった。校内作品展覧会に展示し、その後も本学級前の廊下に展示している。各在籍学級でも発表させてもらえるよう働きかけたが、コロナ関係等もあり残念ながら実現できていない。

### 5. 結果と考察

#### 5.1 生徒の変容

自分で何かを調べたり表現したりできなくなったAが、活動をとおして知らなかった母国のことを知り、興味をもって集中して取り組むことができた。活動中に指導者とのやりとりが飛躍的に増え、作品のこだわりなど自分の意見を表現するようになった。書字が苦手なので手書きだと雑になってしまうが、プレゼンテーションソフトで満足のいく作品が完成し、達成感を感じた。そこから本学級内で発表でき、周りに認められることで自信をつけた。そして、本学級の他の生徒とも積極的に関わるようになり、発話も飛躍的に増えた。

他の生徒も、自分の国や民族について知らないことに本人や家族も気付いた。両親や母国にいる祖父母や親戚に聞く中で母国の行事の意味を知った、その後食事の際にも両親が詳しく説明してくれるようになった、家庭内では身近な日常会話程度しか母語を使わなかったが、母語で文化について話したり聞いたりする機会が増えた、との声があった。既に知っている母国の文化を日本語でまとめるだけではなく、理由や意味などを調べる中で、より深く学ぶことができた。

#### 5.2 考察

生徒の興味・関心を理解し、しっかりと動機付けを行い、実現可能でやってみたくなるようなモデルを示したことで課題の多い生徒も自分の力で作品をまとめることができ、仲間に認められることで生徒の成長へとつながった。活動を通して指導者も生徒の文化に興味を持ち、共に驚き、感心し、感情を分かち合った関係性が生徒の言葉を育んだと思われる。指導者が日本語や日本文化を教える・生徒が教えられるという関係性を超え、生徒が指導者に自分の文化を教えることで共に学ぶ関係性ができた。また、使い慣れない新しいタブレットを指導者と生徒が試行錯誤することによって、さらに共に学ぶ関係性が強化された。

しかし、生徒の多くが日本語入力できず、特に特殊音節は時間がかかった。日本語入力は必要不可欠な能力であり、入力をとおして特殊音節が意識化できるので初期指導段階からの日本語入力指導の必要性を感じた。また、日本語での作品作りと発表にとどまったが、作品も発表も2言語できると両言語をさらに伸ばせた。そして、発表が本学級内と校内の展示だけになってしまったが、在籍学級での発表やオンライン等で保護者へも発表できるとさらに良い活動となった。